

時間より気持ち

国立病院機構災害医療センター
放射線科技師長
小笠原 哲

我々診療放射線技師は、患者さんと接する時間も短くコミュニケーションを通じて信頼を得るのは難しい場合が多い、入院した患者さんが医師や看護師に対してお礼の手紙差し上げた話はよく聞かぬが診療放射線技師の場合は少ない。それでもたまには投書や手紙という形で施設を通じたり、放射線科あての手紙だったりして、いただくこともある。

その中からいくつか紹介したい。この患者さんは上部消化管のバリウム検査を定期的に行っている高齢の婦人で、背中が曲がり体位変換が大変そうな方でした。

「お忙しい日々をお過ごしのことと存じます。先日の検査の時は枕とマットをご用意下さり本当にありがとうございました。今日ほど楽に検査を受けられたのは初めてです。心から感謝しております。昨年は先生が枕をお持ち下さいましたとき、うれしく家に帰ってから唯々感激しました。人はその状態になりませんと分からないものです。お陰様で異常なく安心しております。その後、大腸内視鏡、腹部超音波の検査を行い結果も異常なく安心しております。本当にありがとうございました。」患者の状態に応じた対応を心がけることで、こんなにも喜んでいただけました。

次に、この患者さんは投書でいただいたコメントでした。手術前の腎臓の造影検査で来院された患者さんでした。この患者さんだけ特別に扱っていたのでは無く、様子を見ながら声をかけ検査をしていた患者さんでした。

「レントゲン技師の方の対応が非常に懇切丁寧で、今まで関わり合った不愉快なことが一変してしまいました。何ヶ月か前に某看護短期大学のアンケートにX線技師に対する設問があり、その回答に技術に対してのみ固執しているかの如く、患者をコンペアー上の荷物の様に取り扱う態度を強く非難致しました。学生には人間的素養を加味教育するよう指摘

しました。本日の技師さんは本当に心配りがあり安心して撮影台に横たわりました。検査の折りに言葉をかけていただきありがとうございました。」癌を宣告され、手術となればデリケートな心理状態になるのは当然です。技師は荷物のように取り扱っているつもりではなくても、患者さんがそのように感じてはもともこうもありません。

最後に、乳がんを宗教で治すと悪化させ再入院してきた60歳くらいの婦人でした。高齢の両親と夫・子供に囲まれ来院してきました。周りに心配と迷惑をかけショボンとしながら放射線治療が始まりました。

「お世話になり始めてもう1ヶ月、そんなに日にちが過ぎたと思えないほど、治療が待ち遠しい様な日々を過ごさせていただきありがとうございます。体だけではなく、パーセンテージの多くを占めている心のケアをしていただいで感謝しております。

先生の暖かいお心づかいのお陰で、毎日を明るく幸せに過ごさせていただいでいます。

家族の事を思うと少しでも元気な姿を見せたいという気持ちでいっぱいです。

これからつらい副作用もあるようですが、私も一生懸命ついてゆきたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。」

この1ヶ月は気持ちの整理をするために、家族に順に手紙を書くことをアドバイスしました。癌だからと言って甘えるのではなく、自分が出来ること、してあげられることを考えましようとしてアドバイスし気持ちが前向きになっていきました。手紙が済むと結婚する息子へのお祝い、そしてやがて出来るであろう初孫のお祝いとニコニコしながら報告するようになりました。気持ちが落ち着いたところで、ある本をお貸ししました。

「大切なご本をありがとうございました。心穏やかな優しさと胸詰まる様な切なさに病室に居られず好きな山が見える上の階に行ってみました。生憎のお天気で山は見えませんでした。静かなロビーで前に何回か見た雄大な姿を思い出して素晴らしい一時を過ごさせてもらいました。特にあの本の最後のところは何回読んでも胸がいっぱいになりとても羨ましかったです。最初にご挨拶したとき『頑張らましようね』と励まして下さったお言葉に諸々のことで取り乱していた私は、日が経つに連れて主人と同じ事を言われたり、注意して下さる先生に今日まで甘えさせていただきました。暖かい光を掛けて下さった先生にお会い出来た事を良い思い出として、戴い

たお守りを大切に命ある限り周囲の人々に私に出来ることをしながら暮らすつもりです。先生に教えて戴いた事を忘れないように……

最後に今日まで幸せな日々をありがとうございました。」この患者さんは放射線治療終了1ヶ月後く

らいに亡くなりました。同じ病室の隣のベッドの患者さんが放射線治療室に来て「ありがとう」と言っていましたよと伝えに来てくれました。患者さんと接する時間の長さではなく、寄り添う気持ちの大切さを学んだ患者さん達でした。